

演題番号：9

演題名：ブロイラーにみられた真菌による多発性肉芽腫性炎

発表者名：○長嶺ゆり、阿左美有右、仁平美咲、中村正治、嘉数浩

発表者所属：中央食肉衛生検査所

1. はじめに

食鳥処理場における内臓摘出後検査で、内臓等に多発性に白色結節が認められることがあり、このような病変は一般にマレック病等の腫瘍性疾患を疑うことが多い。

今回、同様の肉眼病変が見られた検体について病理組織学的検査を行ったところ、真菌による多発性肉芽腫性炎と診断したので、その概要を報告する。

2. 材料及び方法

平成25年3～8月にかけて同一農家から管内食鳥処理場へ搬入された38～48日齢のブロイラー4羽について検査を実施した。内臓摘出後検査において白色結節が認められた肺、心臓、肝臓、脾臓、腎臓、膵臓、十二指腸、腺胃、筋肉を材料とし、定法によりパラフィン切片を作製し、HE、アザン、PAS及びグロコット染色を行った。

3. 結果

肉眼所見：各症例で肺と心臓を中心として、諸臓器の表面及び断面において結節が多発して認められた。結節は、直径1mmから2cm大で乳白色を呈し硬結感があった。結節中心は時折壊死し、周囲の組織との境界は明瞭であった。肝臓や脾臓等の腫脹は認められなかった。

組織所見：白色結節が認められた臓器では、大小結節性又はび漫性に拡がる炎症性病巣が観察された。各々の病巣中心には多数の菌糸を含む好酸性壊死物を多量に貯留しており、これを囲むように異物巨細胞やマクロファージを主体とする炎症細胞がおびただしく浸潤していた。さらにその周囲では、様々な程度に膠原線維の増生を伴っていた。いずれの症例の菌糸もPAS及びグロコット染色において陽性で、隔壁をもち、Y字状に分岐していた。以上より、真菌による多発性肉芽腫性炎と診断した。

4. まとめ及び考察

病理組織学的検査より、今回の4症例は全て真菌による多発性肉芽腫性炎と診断した。また、菌糸の形態的特徴からAspergillus属である可能性が示唆された。

アスペルギルスは環境中に常在し、気道感染した後、免疫低下等により発症するといわれる。今回の症例は、肺に病変を形成した後、菌が血行性に播種し他臓器へ病変を形成しているものと考えられた。

また本症例の生産農家において、近時期間に免疫抑制を引起す伝染性ファブリキウス嚢病の集団発生の報告があり、誘因の一つと考えられた。

肉眼所見に着目すると、結節は特に肺や心臓に集中していること、脾臓の腫脹を伴わない等、マレック病とは異なる所見が得られた。今回の病変の特徴を理解することで、マレック病等の腫瘍性疾患と区別し、現場での類症鑑別に役立てたい。